

大学における体育実技の評価に関する研究*

滝 沢 英 夫

I 目 的

実技評価については、各大学とも「大学基準」¹⁾に示された方針にそって、独自の立場より実施しており、その方法も色々と発表されているが^{2) 3) 4)}、種々な面において問題があり、その具体的な方法は未だ確立されているとは断定しえない現状である。先に評価の問題については東京大学の場合の実例などを分析して考察したが⁵⁾、十分な解決を得なかった。今回はさらに実技の具体的目標と、評価項目と方法を再検討し、合せて他の大学の評価の実例を分析して、妥当な評価の方法の手掛りを得んとしたものである。

II 方 法

東京大学の実技評価の実例を個々の問題点について再検討し、合せて質問紙法により都近郊の大学に評価の実例について解答を求め、38校から解答を得たので、その集計結果を参考として検討したものである。なおこの調査は昭和35年に実施したものである。以下この集計結果を「調査」と略称する。

備 考

1) 大学基準協会報第33号

「体育の実技の採点は主として授業内容の範囲において、できる限り客観的に個々の学生の現状を把握し、これを体育の目標との関連において理解し、一定の基準を設けて採点することが望ましい。

a. 採点の実際は個々の学生の出席状況、技術向上の程度、学習態度、知的理解の程度など

から評価する。

b. Cクラス（運動を禁止し生活指導を必要とするもののクラス）の採点は、出席、生活記録、レポート、健康知識の理解と態度などから評価する。」

2), 3) は引用文献参照。

III 内 容

1. 評価の項目

評価項目を如何なる観点よりとりあげるべきかは、大学基準の「大学における保健体育の在り方」¹⁾に示されている通り、それぞれの大学の实技目標との関連において、決定されるべきである。そのためには、おのおのの大学における学生の現状に適した具体的な目標の設定が当然必要である。

例えば本学においては次のように具体的な目標を示している。

- 1) 体育実践の習慣を身につけ、スポーツに親しむ態度を養うこと。
 - 2) 運動能力検査によって、自己の体力を知り、身につけた体育実践の習慣によって体力の増進をはかること。
 - 3) スポーツを体験することにより、技術の向上に努力する楽しさを味わうこと。
 - 4) 競技ルールの理解と遵守を基準として、フェアプレイの精神を身につけること。
 - 5) 集団における自己の責任を知ること。
 - 6) きびきびと行動する習慣をつけること。
 - 7) 施設用具を大切にすることが心を涵養すること。
 - 8) 身体虚弱者、病弱者等に対しては、そのおのおのに適した運動および保健指導をおこない、体育の効果をあげること。
- 以上のような具体的目標をもとにして、とりあ

* HIDEO TAKIZAWA: Study on the Evaluation of Physical Education Training Programme in Universities

げた評価項目が次の5つの項目である。

- ①出席の評価……………1)にあたる
- ②運動能力の評価……………2) “
- ③スポーツスキルの評価……………3) “
- ④態度の評価……………4), 5), 6), 7) “
- ⑤レポートの評価……………8) “

このことについて他の大学の場合をみると、「調査」の結果は、出席、技能、態度、知的理解の4項目を採用している大学が多く、どの大学でも、出席の評価を項目としてとりあげている(日本体育大学のみが項目として採用しておらなかった。これは体大の性格上特殊なものと思う)。この調査の結果を項目別にグルーピングして集計したものが第1表である。

第1表 評価項目について (N=38)

項目型	出席	態度	技能	知的理解	運動能力	校数	%
A型	○	○	○	○		11	28.9
B型	○	○	○			8	21.0
C型	○	○	○	○	○	8	21.0
D型	○	○	○		○	5	13.2
E型	○	○		○		2	5.3
F型	○		○	○	○	1	2.6
G型	○		○	○		1	2.6
H型	○	○				1	2.6
I型	○					1	2.6
*項目採用校数(%)	37校(97.4)	36校(94.7)	34校(89.5)	24校(63.2)	12校(31.6)		

(A) 出席の評価

この項目は実技という科目の性格上、授業に出席して実習し、体得する必要から、必須の条件として採用されている。したがって、各大学においても、これに大きなウェイトをおいて評価をしている現状である。

本学においても総点の50%においており、その取得状況は先へのべた²⁾ような現状で(第2表参照)、学生の出席率も第3表のように極めて高い。この事はほとんどの学生が体育実技に出席することを当然と思い、また喜んで参加しているこ

とを示している。

他の大学の場合を調査結果より推察するとそのウェイトを総点の50~60%においているものが半数以上である(第4表)。その合格点との割合も第4表(その2)で示されているように、「出席さえして、出席点を充分とれば合格する」ものが全体の68%も占めている。

以上のことから、出席の評価のウェイトを現在のままでよいか、また低くさげた方がよいかは、各大学においても、学生の出席率の調査や、優良可などの割合を検討して、再考すべき点である。

第2表 出席点取得状況

出席点年度	60点	55点	50点	45点	40点以下
27年度(200名)	177(88.5%)	16(8.0%)	4(2.0%)	2(1.0%)	1(0.5%)
	50点	45点	40点	35点	30点以下
28年度(195名)	154(78.9%)	21(10.8%)	9(4.6%)	4(2.1%)	7(3.5%)
	50点	45点	40点	35点	30点以下
33年度(200名)	147(73.5%)	24(12.0%)	15(7.5%)	6(3.0%)	8(4.0%)

第3表 本学における出席率 (N=400)

年度	昭26年度(%)	昭35年度(%)
1年生	91.5	92.9
2年生	87.7	81.0

(注) 出席学生の10%無作為抽出による

第4表 出席の評価(その1)

ウェイト別	校数	%
80%以上	3	7.9
75%	1	2.6
70%	4	10.5
60%	11	28.9
50%	13	34.2
40%	2	5.3
30%以下	2	5.3
他と合せて評価	1	2.6
評価せず	1	2.6

第4表 (その2)

合格点との割合	校数	%
合格点以上に評価している	13	34.2
合格点と同じに評価している	13	34.2
合格点以下に評価している	10	26.3
その他(他と合せて評価または評価せず)	2	5.3

(B) 運動能力の評価

基礎的な運動能力のテストを実施し、学生に自己の体力を知らせ、弱点を自らの努力によって向上させ、身体的改善をはかるよう習慣づけることは重要なことである。したがって、これが体育実技の評価の対象として考えられることは当然であるが、しかし実際面において、施設、用具、スタッフなどの点で、かなりの準備が必要であるので、なかなか実施されえない現状である。

本学では各学期毎に運動能力テストを実施しているが、とくに一年生に対しては、垂直跳、サイドステップ、腕立伏臥腕屈伸の3種目を1組として実施し、ある一定の基準に達しない者はとくに体力の向上に努力する必要があるものとして、「トレーニング・グループ」を編成して指導している。

このように運動能力の評価と関連して、体力低位者に対する指導の問題も新しい体育実技の問題点であるが、それ以前に運動能力を測定するテスト種目の決定にも問題がある。各大学においても、それぞれ独自の運動能力テストを実施しているが、大学体育協議会正課部会では、全国の大学で共通なテストをおこなう趣旨のもとに、そのテスト種目の検討をおこなっている。昭和35年度の運動能力テストの種目として、垂直跳、サイドステップ(20秒、80秒)、腕立伏臥腕屈伸の4種目を実施し、その結果も種々発表されている³⁾。

しかし先に述べたように、このテストの実施に困難な点が多いので、実状としてはなかなか採用しえず、評価の項目としてとりあげえない現状である。

「調査」によって運動能力の評価を項目として採用している大学をみると約30%にすぎない。その内訳は第5表のようである。その評価のウェイトも総点の15%におくものが3分の1で一番多くみられた。

以上のことから、運動能力の評価は、その実施種目の適否、身長体重による有利さ、そのウェイトのおき方などの問題を含んでいるが、それ以前の問題として、運動能力を評価の項目に加えるか否かという根本問題がのこされているのである。

第5表 運動能力について (N=38)

ウェイト別	校数と%	校数	%
50%		1	2.6
20%		1	2.6
15%		4	10.5
10%		2	5.3
5%		2	5.3
他と合せて評価する		2	5.3
評価せず		26	68.4

(C) スポーツスキルの評価

スポーツのスキルの評価に必要なことは、体育の具体的目標と到達基準との関連の問題である。この関連において、スキルの種類とその水準を設定し、ウェイトをどの位にするかが決定されるのである。

正課体育の目標が選手の養成ではないから、その水準も、体験して現在・将来レクリエーションとして楽しめる程度におくことが妥当であろう。このことは昭和34年度の全国の大学の「体育実技の評価に関する調査」の集計結果でも明らかである⁶⁾。

本学においては先に発表したように⁵⁾、スポーツを楽しめる程度に水準をおき、授業内容としてゲームを主として展開し、その間に基礎を時々おこなっていく方針をとっているため、ゲームを楽しめる最低のスキルをテスト種目としている。その例を二三あげると第6表のようである。

スポーツのスキルが実技の目標のうち大きなウェイトを占めていることを考えると、この表でわかるように、総点の20%というウェイトのおき方、最高点と最低点との差の小さいこと、スキルの進歩点の配慮を如何に加味するか、種々検討を要する問題がある。

スキルのウェイトをどの程度に他の大学がしているかは第7表でわかるように、総点の20%としている大学が一番多く、全体の3分の1である。ほとんどの大学はそれ以下にウェイトをおいている。この割合から考えるならば、ここにも大学で正課体育に優秀な成績を得た学生でも、卒業

第6表 スキルテストの一例

	野 球	バスケットボール	サ ッ カ ー
テスト種目	遠距離の正確投	A. 30"フリーシュート B. ドリブル・ランニングシュート	キックの正確度
人員および時間	1チーム10名×6チーム 約1時間	1チーム8名×6チーム 2種目で約1時間	1チーム10名×4チーム (7人制) 約1時間
テストの方法	<ol style="list-style-type: none"> ホームと2塁間の距離127f$\frac{2}{3}$の長さを正確に投球する。 合図と共にボールの位置より5f後よりスタートする。 向うのパートナーは投げられたボールを受けベースにタッチする。 タッチした時までの時間を計測する。 2回おこないよい方をとる。 	<ol style="list-style-type: none"> A1. ゴール下にボールをもって立ち、30"間連続シュートする。 2. ゴール数とシュート数を数える。 3. ゴールは両サイドのも合せ4ゴール使用する(4人同時におこなえる) B1. ゴール下にボールをもって立ち合図でスタートする。 2. ドリブルで進み、コートの上にあるゴールを全部入れてくる所要時間をはかる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. バックボールドの手前15mにボールをおく。 2. 1~2m助走し、ゴールをめがけて強くキックする。 3. 3回おこなって合計点をとる。 4. 室内ハンドボールのゴールの広さに入ったら10点、サッカーのゴールは5点、残りのバックボールドは2点、他は0点。
テストの評価	$3''5$ 以内 = a $3''6 \sim 4''0$ = b $4''1$ 以上 = c $a = 20$ 点, $b = 16$ 点, $c = 12$ 点を与える。	<ol style="list-style-type: none"> A1. ゴール数×2+シュート数=得点とする。 2. 34点以上 = a, 33~24点 = b 23点以下 = c B. 25"以内 = a, 26"~40" = b 41"以下 = c A Bとも $a = 10$, $b = 8$, $c = 6$ 点	20 点以上 = a 19 点~ 10 点 = b 9 点以下 = c $a = 20$ 点, $b = 16$ 点, $c = 12$ 点を与える。
検討	<ol style="list-style-type: none"> 1. 任意抽出15名のテストの結果。 $a = 55$ (35.5%) $b = 65$ (41.9%) $c = 35$ (22.6%) 2. aの%が大きい。 3. 秒の区切りは1-2塁間の盗塁の場合、早いもの3"5、普通は40"までなのでこの様に区切った。 4. 3"4以内をaとすると $a = 27.1\%$, $b = 50.3\%$となる。 5. 秒の区切りの検討が必要である。 6. 1mそれでも0"5はちがうので正確さをみるには適している。 	<ol style="list-style-type: none"> A1. 任意抽出275名のテストの結果。 $a = 29.1\%$, $b = 42.9\%$, $c = 28.0\%$ 2. a, b, cの分け方を検討する必要あり。 3. ゴールしたものを3点、ミスシュート1点の比重はゴールを重要視したもので、この点を2:1とするか、4:1にするかさらに検討を要する。 B1. 任意抽出270名のテストの結果。 $a = 69$(25.6%), $b = 152$(56.3%) $c = 49$(18.1%) 2. 秒の区切りに検討を要する。すなわち, a, bが多すぎる。 3. テストとしてはやさしい。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 任意抽出134名のテストの結果。 $a = 42$ (31.3%) $b = 54$ (40.3%) $c = 38$ (28.4%) 2. サッカーを受講した学生は初心者は半数以下であった。 3. テストはかなりむずかしいものであった。

後レクリエーションとして共に楽しむだけの能力を欠いているという批判の一端がひそんでいる。

第7表 技能点について (N=38)

ウェイト別	校数と%	校数	%
30%		5	13.2
20%		11	28.9
15%		6	15.8
10%		5	13.2
他と合せて評価する		5	13.2
その他		2	5.3
評価せず		4	10.5

(D) 態度の評価

態度の評価は、他の評価項目が数理的に処理され客観的に採点されうることにくらべて、教官の主観が多分に加えられる危険性を含んでいる。より客観的に評価すべく努力して、種々な項目を設定して、それをチェックする方法を採用しても、実技を指導しつつ個々の学生について項目毎にチェックすることはなかなか困難である。しかしたとい困難であっても、主観的に評価するより、簡単な項目を少し設定し、できうる限りチェックすべく努力して評価する必要がある。

本学では次のような項目を設定している。

- (1) 実技用具の借用態度 (用具当番を毎週指定し、その遂行態度をみる。)
- (2) 体育館またはコート・グラウンドの整備の態度 (掃除当番またはライン引き当番の遂行態度をみる。)
- (3) 練習態度 (キャプテン・マネージャーとしての責任遂行態度をみる。)

これらの項目について、立派にその責任を果たした場合は⊕、十分にやらず他に迷惑をかけた場合は⊖として厳重にチェックをしているが、先にのべたように²⁾、なかなかむずかしく普通におこなったり、またチェックしにくくて態度の評価点を与えられない学生が約 $\frac{2}{3}$ もあるのである。ごく普通に行動し、あまり目立たぬ学生を如何にチェッ

クし、評価すべきかが今後の問題である。

このことは他の大学においても同様な困難さを示しており、その結果は、第8表に明かに示されている。態度点を評価の項目として採用している大学が95%近くもあるにもかかわらず、ほとんどが項目を設定せず、教官の主観によっておこなわれているのが現状である。

このように態度の評価は、客観性の問題において非常なむずかしさがあり、今後検討すべき余地を大いにのこしている。

第8表 態度点について (その1)

ウェイト別	校数と%	校数	%
40%		1	2.6
30%		1	2.6
20%		9	23.7
15%		4	10.5
10%		16	42.1
5%		1	2.6
他と合せて評価する		3	7.9
加味している		1	2.6
評価せず		2	5.3

第8表 (その2)

項目	校数と%	校数	%
項目を設けて評価する		9	23.7
別に設けずに教官独自で評価する		27	71.0
評価せず		2	5.3

(E) 知的理解の評価

この評価は本学では採用していないが、調査によると $\frac{2}{3}$ が評価項目として採用し、主としてペーパーテストとして実施している。内容はスポーツのルール、用語などが出題されており、そのウェイトも10%としているものが多い。「調査」の結果は第9表のようである。

この評価は客観的に評価しうる利点もあるが、テストの内容の検討の必要、またさらに進んでこのような知識のテストが大学においても必要であるか否かの問題も検討を要する所である。

第9表 知的理解について (その1)

ウェイト別	校数と%	校数	%
20%		3	7.9
15%		3	7.9
10%		11	28.9
5%		3	7.9
他と合せて評価する		4	10.5
評価せず		14	36.8

第9表 (その2)

種類	校数と%	校数	%
ペーパーテスト		21	55.3
レポート		3	7.9
評価せず		14	36.8

(F) Cグループの評価

Cグループとは前述のように¹⁾、病気などの理由によって運動禁止または制限の必要がある学生のグループである。これらに該当する学生は各大学にもかなりの数であり、他の普通の学生とは異なる措置が当然おこなわれるべきである。現実には体育教官の中に医師の資格を有する教官を欠くことが多いので、その指導も充分とはいえない。したがってこの評価については十分な検討がなされていない。

本学におけるCグループの学生は全学生の約5%近くを占めている現状で、その内訳は第10表のようである。評価は出席、レポート、態度の3項目より評価し、そのウェイトは、出席、態度の項目は一般学生と同様であり、一般学生の運動能力点とスポーツスキル点の合計35点がレポート点にあたるようにし、Cグループといえども正課実技において不利な評価にならぬよう考慮している。

第10表 Cグループ学生について

グループ 年度	結核性疾 患 (人)	ツ反応陽 転 (人)	心臓疾患 (人)	その他の 疾病(人)	合 計 (人)
24	92	21	(三 十 四 年 度 よ り 設 置)	26	139
25	109	5		31	145
26	73	12		19	104
27	186	95		61	342
28	179	153		108	440
29	235	359		75	669
34	98	94	50	46	288
35	20	10	13	62	105
36	40	23	33	72	168

(G) 総点について

体育実技の評価の項目別の検討の結果、総合計をした総点についてみると、大学における他学科の評価点に比して、体育実技の総点は非常に高い方に集っている。これは出席、態度の項でふれたとおり、そのウェイトの比重を研究して改善すべきである。一例として本学における総点について検討した結果は、第11表のようである。

第11表 総点の分布

学年別・ク ラス別学生数	成績別(%)				備 考	
	優 (%)	良 (%)	可 (%)	不可 (%)		
31 年度 (1 年)	文1 (840)	77.9	19.5	2.4	0.2	○各学年は前期 ○留年、休学を除く。 ○優 80以上 良 79~65 可 64~50 不可 49以下
	文2 (363)	70.2	25.3	4.1	0.3	
	理1 (525)	84.4	14.5	1.1	0.0	
	理2 (382)	83.8	15.2	1.0	0.0	
	計 (2,110)	79.2	18.5	2.1	0.2	
32 年度 (1 年)	文1 (815)	78.0	19.0	2.8	0.1	
	文2 (376)	75.5	19.9	4.5	0.0	
	理1 (508)	85.5	13.2	1.6	0.0	
	理2 (408)	89.0	10.3	0.7	0.0	
	計 (2,107)	81.4	16.1	2.4	0.0	
33 年度	文1 (812)	71.2	25.9	2.9	0.0	
	文2 (372)	62.6	32.0	5.1	0.3	
	理1 (511)	73.4	24.1	2.3	0.2	
	理2 (437)	76.2	20.8	3.0	0.0	
	計 (2,132)	71.2	25.5	3.2	0.1	

31 年度 (2 年)	文1 (831)	72.1	20.5	6.5	0.9
	文2 (390)	52.3	34.1	10.0	3.6
	理1 (533)	79.0	16.3	3.2	1.5
	理2 (398)	80.7	16.6	1.7	1.0
	計 (2,152)	71.8	21.2	5.4	1.6
32 年度 (2 年)	文1 (840)	56.5	33.1	9.0	1.3
	文2 (363)	63.9	25.9	9.1	1.1
	理1 (525)	79.2	19.0	3.0	1.7
	理2 (382)	72.8	22.5	3.1	1.6
	計 (2,110)	65.6	26.4	6.5	1.4
33 年度 (2 年)	文1 (815)	62.0	28.5	7.1	2.4
	文2 (376)	49.7	32.2	13.3	4.8
	理1 (508)	71.1	21.9	5.3	1.7
	理2 (408)	73.0	20.3	4.4	2.2
	計 (2,107)	64.1	26.0	7.3	2.6
31年度(4,262)		75.5	19.8	3.8	0.9
32年度(4,217)		73.5	21.3	4.5	0.7
33年度(4,239)		67.7	25.7	5.2	1.4

IV 結 び

以上大学における正課体育の実技の評価について、本学の実例や他大学の調査の結果などから、色々な側面より検討してみたが、まず第一に検討すべき点は大学体育の目標を具体的に確立し、これを根拠として評価がなされるべきであるというこ

とである。評価の問題点をあげると次のとおりである。

- 1) 実技の評価の総点の高いこと
- 2) 評価項目の妥当性
- 3) 出席の評価のウエイト
- 4) 運動能力の測定種目
- 5) スキルテストの種目とそのウエイト
- 6) 態度の評価項目の設定
- 7) Cグループの対策

これらの問題については、全国の大学の実例および諸外国における実例などを比較研究し、問題解決の方法をさらに進めていく必要が痛感されるのである。

文 献

- 1) 大学基準協会：会報第33号，72，1957
- 2) 川村英夫：わたくしの大学の正課体育の評価，体育の科学第3巻1号，8，1952
- 3) 江橋慎四郎：東京大学における体育実技の評価，体育の科学第3巻1号，7，1952
- 4) 相馬武美：大学正課体育における評価の一試案，体育の科学第3巻1号，10，1952
- 5) 滝沢英夫：大学における体育実技の評価に関する一考察，体育学研究第3巻4号，120，1958
- 6) 大学体育協議会編：大学体育十年誌，151，1960

STUDY ON THE EVALUATION OF PHYSICAL EDUCATION TRAINING PROGRAMME IN UNIVERSITIES

by

HIDEO TAKIZAWA

The present study is an attempt at arriving at a rational and reasonable method of evaluation in physical education training programme in universities through an analysis of data on actual evaluation of physical training at the University of Tokyo and of those data collected from other universities by questionnaires. The final objective of the analysis was to find out a standard by which to evaluate the physical training at universities. The results of our analysis were as follows:

1. The standard of evaluation is too low.
2. It is not certain whether the evaluated items are appropriate.
3. It is questionable whether or not class attendance should be so highly evaluated.
4. The items of the Motor Fitness Test are not all of them appropriate.
5. It is necessary to set up a standard for evaluating the attitude of students in physical education training.
6. The kinds of skill tests and the place of such tests in evaluation must be discussed.
7. The contents of training for the "C Group", which consists of invalid persons and the like, should be carefully planned.

I felt at the end of this analysis that it is necessary to study more cases of evaluation in this field with ample data to be collected from universities foreign and domestic alike.